原始仏教における loka の概念

橋　本　哲　夫

四部の Nikāya に於ける loka という語の表示の方法は二種ある。一つは次のように loka が sadevaka 等の語によつて限定されている場合である——

sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇa brāhmaṇiyā pajāya sadevamanussāya

（天・魔・梵天を含む世男において，沙門・バラモン・神々・人間を含む生物において）

もう一種はいかなる限定詞も付加せず，単独で使用されている場合である。

両者を見較べた場合問題が生じる。先ず，単独の loka は種々の loka の内の一種を意味しているのかあるいは種々の loka の全体を意味しているのかという問題である。P. T. S. D. によれば，loke とは in this world, among men とあり，あたかも manussaloka のごとくである。しかし一方では，ayaṃ loka と限定詞をつけた場合も the world of men であり，これは para loka と対になつている。loka にすでに manussa loka の意味があるならばこの表現は不自然である。第二の問題は，単独の loka とは上にあげた種々の loka とは別の発想で考えられているのではないだろうかという問題である。これらの問題を考究するに際して loka 用例の非常に多いスッタ＝ニパータを資料とする。

次のような用例がある。限定詞つきの loka ——(A) sadevaka loka (86, 377, 443, 544, 756, 760)。sabrahmaka loka (135)。brahmaloka (139, 509)。manussaloka (683)。deramanussa loka (1063, 1081)。siva loka (115)。(B) ayaṃ loka para loka (=asmiṃ loke paraṅ ca) (185, 516, 520, 779)。(C) idha loke (458, 802, 912, 948, 1043, 1044, 1045)。(D) sabbaloka (25, 56, 73, 150, 348, 378, 486, 515, 516, 521, 527, 642, 1009, 1104)。

A の sadevaka loka については，loka が特殊な loka（例えば人間世界），あるいは単なる loka 一般であるかどうかにかかわりなく，全体としてそれらは「生物がそこに生まれる領域，境涯」又はある特定の人物を取り上げる際の「適用範囲」であり，種々に分類された生物の名称でもある。ところでこれらの内 deva loka, manuṣyaloka, brahmaloka は Veda の内に見られる表現であるので，たとえ sadevaka loka 等の非 Veda 的表現がなされていても，さらに ayaṃ loko, para loko, Brahma loko, sadevako と特別な並べ方がなされていても Veda 的な

意味内容から遠く隔たつてはいないと考える。仏教思想として深い意があるのではなく当時の一般的観念をそのまま採用したのであろう。

B の ayam loko paro loko は Veda にも見られるが，特に仏教では kuhiñci loke を用いても類似の内容が言われるので，「どんな世界においてでも」というほどの意味を表わすために Veda から言葉を供りてきたものと考える。

C の idha loka は大部分が供犠という語と共に用いられているので，Veda 的 this world と考える。

D の sabbaloka の用例のうちには全方向を意味している用例がある。

mettar ca sabbalokasmiṃ mānasam bhāvaye aparimāṇaṃ uddhaṃ adho ca tiriyañ ca asambādhaṃ averaṃ asapattaṃ.（また全世界に対して無量の玆しみの意を起すべし。上に下に横に，障礙なく怨恨なく敵意なき）(Sn 150)

ここで，sabbaloka と uddham（上に）・adho（下に）・tiriyam（横に）とは同義であると考える。さらに，この三方向に majjhe（中央）を加えた四方向が Sn 1103 では lokasmiṃ と Sn 1068 では loke と同義である。従つてこの sabbaloka は決して Veda 的諸 loka の全種を意味するのではなく「全ての方向」という意味である。

又，sabbaloka は全時間でもある。Sn 645 では次のようにある。

Yassa pure ca pacchā ca majjhe ca n'atthi kiñcanaṃ, akiñcanaṃ anādānaṃ taṃ aham brūmi brāhmaṇam.（前にも後ろにも中間にも，一物をも所有せず，無一物で，執着のない人——彼を私はバラモンと呼ぶ。）

類似のことが Sn 1104 で sabba loka を用いて言われているので，さらに，pure, pacchā, majjhe は注によつて過去，未来，現在であるので，sabbaloka は過去・未来・現在つまり全時間である。

しかし一方では sabbaloka は Veda 的諸 loka を意味する場合も多い。Sn 521 では sabbaloka は devamanussa loka と考えられている。又，その他の用例においても sabbaloka が sadevaka loka あるいは devamanussaloka と見なされる場合が多数存在する。この二種の sabba については後に述べる。

次に単独の loka についてであるが，J. Gonda は loke が idha loke の代用であることは稀ではないとする（Loka——world and heaven in the Veda. 1966, Amsterdam, p. 70）が，loke が確実に idha loke を意味している場合は Sn 115 で，siva loka と対立して用いられている例と，Sn 249 で供犠について述べる中で使われている例のみである。一方，単独の loka は Veda 的諸 loka とは異なる視点か

ら考えられていると見うる面がある。Sn 1068, 1103 では loka は uddham（上に），adho（下に），tiriyam（横に），majjhe（中央に）と同義である。さらに，前出の Sn 645 で pure, pacchā, majjhe を用いていわれた内容が Sn 861, 922 では loke, lokasmim を用いて言われるので，loka とは過去・未来・現在でもある。従つて単独の loka も全方向，全時間を意味する場合がある。この loka はそれ故 sabbaloka と同義となる。loka と sabbaloka との同義性はいくつかの用例の内に見られる。Sn 1104 では修業者は sabbaloka において何ものにも執してはならないと言われるが同様のことは Sn 915, 922, 1103 では loka を用いて言われる。Sn 455 では carāmi loke とあるが Sn 25 には carāmi sabbaloke とある。Sn 1033 では loka は無明によつておおわれている etc. とあるが，類似のことはでは Sn 348 では sabbaloka を用いて言われる。以上より，単独の loka の一部は sabba loka の非 Veda 的なものと同義であるが，Veda 的 loka あるいは sabbaloka とはどのようにして区別可能であろうか。

その問題は四 Nikāya の散文の部分ではほとんど単独の loka のみが用いられ，執着あるいはそれに類する観念の成立基盤あるいは適応範囲として考えられていることからその場合の loka あるいは sabbaloka は全時間・全方向を意味すると考える。これを手がかりとすると Sn 496, 783, 794, 1048 で用いられている kuhiñci loke も同じく非 Veda 的 loka の意味である。「どの loka においても」つまり，「どの方向においても，どの時間においても」という意味である。ayaṃ loko paraṅ ca も執着等の成立基盤と考えられている場合は全方向，全時間となる。

結論——単独の loka は執着等の成立基盤，適応範囲と考えられる場合は Veda 的諸 loka とは関係が薄く，執着等の成立基盤，適応範囲としての sabbaloka と同義であり，上，下，横等の全方向であり，過去，未来，現在の全時間を意味している。

（了）

（大阪大学大学院）